

◇東方 project 11次作品SS

ねえ、遊びましょう？

(R-18 フランドール・スカーレット)

作 : neneco

背中せなかに石の冷たさを感じて、男は意識いしきを取り戻した。

仕事を終えて帰る途中とちゆう、何者かなにものに襲おそわれた——のだろう。頭がぼうつとする。襲おそわれたときに剥はぎ取とられたのか、服は何も着ていない。

痛む頭を押さえようとして、男は気がついた。

両手両足に頑丈がんじょうな枷かせがはめられている。そこから伸びた鎖くさりは石壁いしかべに繋つながれ、ろくに身動みうごきすることもできない。

薄暗うすくらい部屋へや。明かりはわずかなランプ。

男はこの牢獄ろうごくのような部屋へやの中に捕とらえられていた。

「やつと気がついたのね」

奥から聞こえたのは少女しょうじよの声。

紅あかい二つの瞳ひとみが部屋へやの隅すみに灯ともる。

その紅い光が男のもとにすつと近寄ちかよると、暗闇くらやみからにじみ出るように少女が姿を現あらわした。

「壊こわさないように遊びなさいって、お姉ねえさまに言われたの」

赤い服に黄色のスカート。頭にちよこんと帽子ぼうしを乗せた、幼さの残る可愛かわいらし

い少女だ。

「言いつけを守らないと、また閉じ込められてしまうわ」

陶器のように白い肌。

血に濡れたように紅い瞳。

「人間の里に行ってみたって言ったら、ダメだって言われちゃった」

背中から伸びた、生物のものらしくない鉋物のような羽。

「だからね、新しいおもちやをちょうだいってお願いしたの」

噂話が好きな男は、この少女のことを聞いたことがある。

湖畔にある紅魔館に住み、最近は外にも姿を見せるようになったという、吸血

鬼姉妹の妹。

妖怪の中でも飛び抜けて凶悪な少女。

フランドール・スカーレット。

「そうしたらね、あなたをプレゼントしてもらっちゃった」

悪魔の妹が嬉しそうに両手を合わせて無邪気に笑う。

少女は男のことを「おもちや」と言った。

これからいったい何が行われるのか。

不安に怯える男をよそに、フランドールは襟元のスカーフに手をかけてするりと引き抜く。

続いて上着を脱ぎ、スカートを下ろし、ためらうことなく下着を脱ぎ捨てる。暗がりの中にフランドールの白い裸体が浮かび上がった。

「キレイでしょう？ 私の羽。ねえ、キレイでしょう？ 血に濡れたこの身体」
そう言うと、フランドールは男の身体に覆い被さった。

驚くほど柔らかい少女の身体。

なめらかな肌をしたフランドールが、男の上を這い上がる。

フランドールの身体から甘い香りが漂う。とても魅力的な香りだった。徐々に恐怖が薄れていく。

気がつけば、頬が触れ合うほどの位置にフランドールの顔があった。

そして、耳元で彼女がささやく。

「ねえ、遊びましょう？」

少女の裸はだかを前にして、男の頭に淫猥いんわいな考えが浮かぶ。

だが、フランドールは男の返事を待たずに身体を引いていた。

そして、男の両脚りょうあしの間に跨またがるように腰を下ろす。

ふくらみの薄いうすなだらかな胸や、まったく遮まぎるものがない秘裂ひれつが男の前に晒さらされていた。

誘さそうように見せつけるフランドールの裸身らしんから、男は目を離はなすことができない。

まるで、媚葉びやくでも嗅かがされたかのようだった。

先ほど触れた肌はだの感触が頭に浮かぶ。

あの柔やわらかな身体がどうしても欲しい。そんな暴力的ぼうりきよくてきな思いが急速きゅうそくに膨ふくれあがる。掴つかみ掛かかろう手を伸ばしたが、手枷てかせに阻はばまれ届とどかない。その苛立いらだちがますます男を興奮こうふんさせていく。

「まだ全然ぜんぜん触ふれてないのにもうそんなに大きくしてるなんて、変態へんたいさんなのかしら

楽しそうな微笑ほほえみを浮かべて、フランドールは男のそそり立つ股間こかんに触れた。

「それに、こんなに硬い……」

フランドールの小さな手に撫でられただけで、びくりと跳ね上がる。

男のモノを面白そうに眺めていたフランドールは、おもむろに屈み込むと先端に軽くキスをした。

「ちゅ……ん、は……ちゅ」

そのまま亀頭の周りに舌を這わせていく。

「ん……ちゅ、ん、んっ……、っ……ちゅ」

啄むようなキスと舌尖で突くだけの軽い愛撫。それが先端だけに繰り返される。

快感が先端に止まり身体の奥まで届かない。執拗に焦らされる男のモノは、

さらに大きく硬くなっていく。

「っは……、ふふ、ね、きもちいい？」

残忍な悪戯をしている顔で、フランドールが男の顔を見上げた。

わかっいてやってやっている顔だった。

わざと大きな刺激を加えないまま、焦らし続けて男がどこまで耐えられるか楽しむつもりなのだ。

男に向けられるフランドールの目がすつと細くなる。「ねえ、遊びましょう？」
——無言のままそう語っていた。

状況に流されるだけだった男に中に怒りが沸き上がる。その怒りを込めて、男はフランドールを睨み返す。

するとフランドールは、意外なことにびっくりした様子で男の視線を受け止めていた。やがて楽しそうに笑う。

「ごほうび、あげる」

そして、フランドールは口を大きく開け、男の先端を啜え込んだ。

「……は、む」

あまり大きくはない口の中で、先端が鉛を転がすように舐め回される。

「ん……あ……は……ふ……っ……」

唾液に濡れた口腔に亀頭が包み込まれ、時折伸びてくる舌がカリ首を這い回る。

「は……ふあ……ん、んっ……ちゅ……っ」

舌が裏筋を何度も往復し、筋の隙間まで丹念に舐め上げられた。舌先で先端を

つつかれると、誘い出されたようにカウパー液が溢れ出す。それをフランドールは、尿道に舌先を差し入れて掬い出し、こぼれそうになる唾液と一緒に飲み込んでいく。

先ほどよりもずっと大きな快感。

だが、やはり刺激は先端だけに集中していた。竿に軽く添えた手は動かさず、奥まで飲み込もうともしない。上目遣いで男を見上げるフランドールの目が意地悪に笑っている。

それでも、こんな刺激に長時間耐えられるわけがない。

腰の奥に溜まった快感が、何度も大きく膨らんでは引いていく。

その間隔が短くなってきた。

男の口からうめき声が漏れる。

それに気づいたフランドールが尿道に尖らせた舌先を差し入れてきた。止めとばかりに舐め上げられる。

快感が弾けた。

男の視界が白く染まる。

大きな衝撃。

溢れ出す白濁液をフランドールの口の中にぶちまけた。

一度や二度では収まらない。焦らされただけ何度も衝撃が訪れ、そのたびに吐き出していく。そのすべてを、フランドールは口の中で受け止めていた。

ようやく男の射精が落ち着いた。

フランドールは口の中に男の精液を含んだまま顔を上げる。そして、口元にあてた手の上に口の中の精液を広げた。

「こんなに出るんだ」

まだ口に残っている男の精液を飲み込みながら。

「でもこれであなたの方はいいよね。次は、私の準備」

フランドールが男の脚を挟んだまま膝立ちになる。毛の生えていない脚の付け根が丸見えになった。その間にある微かに湿り気を帯びた割れ目を、フランドールは自分の指で押し広げる。

「……ん」

光の少ない部屋の中でもわかる鮮やかなピンク色。

「私は痛くても平気だけど、濡れてないとあなたのがダメになっちゃうよね？
だから——」

そう言うと、フランドールは指先に男の精液を絡め、割れ目の中に差し込んだ。

「ふあっ……っ！」

根本まで挿れた中指で掻き回して引き抜くと、入り口を撫で回しながら指に精液を絡め直して再び奥まで沈めこむ。

「んうっ！ は……っ、あ、んん……っ」

男の目の前で、ぬらぬらと光る秘裂を白い指先が出入りする。精液を奥まで塗り込むような指の動きから男は目が離せない。

「まだ……ん、あつたかいよ……」

フランドールの痴態を見せつけられて、男の股間は勢いを取り戻して脈打っていた。

「あ……おつきくなった」

男の回復を確認したフランドールは自分の中から指を引き抜く。奥から溢れ出した愛液とフランドールが塗り込んだ精液でどろどろになっていた。

すっかり硬くなった男の肉棒にフランドールの手が触れる。

蜜壺の入り口に導かれた。

ちゅぷりと、先端にぬめり。

フランドールの口元が、ニイっと吊り上がる。

「あは……入れちゃえ」

するとフランドールは、いきなり全ての体重をかけて硬い肉棒の上に腰を落とす。した。

「っ、あああああああああああ——つ!!」

男のモノが膣内を一気に貫き、一番奥を突き上げた。室内に悲鳴のような絶叫が響き渡る。

フランドールの身体は大きく反り返り、背中の羽が痙攣するように震えていた。

ただでさえ小さな身体。いくら濡らしてほぐしたといっても中指一本分。それ

も子供の指だ。男の太い肉棒をいきなり全部挿れるのは無理がある。

しかし、フランドールは身体を浮かせると、再び体重をかけて腰を落とした。亀頭が見えるまで引き抜かれた肉棒が、一気に根本まで見えなくなる。

「ひううああんんんんんんん———っ!!」

暗い部屋の中でまた悲鳴が上がった。

そんな乱暴な挿入をフランドールは繰り返す。

男のモノは狭い膣の中で強引に擦り上げられていた。フランドールが身体を落とすたびに、激しい快感が先端から根本まで走り抜ける。肉棒はさらに硬さを増していき、それがフランドールの内側をますますきつく抉る。

そんな行為が何度か繰り返されたあと、男の上でフランドールの動きが止まった。

息遣いは荒い。羽はまだ痙攣を繰り返している。それなのに、フランドールの表情は恍惚としていた。

「すげい……よ。まるで……、身体……奥に、杭を……打ち付けられて……みた
い……」

心臓しんぞうに杭を打ち付けると吸血鬼は死ぬという。では、肉杭を打ち付けられたらどうなるのか。

潤うるんだ紅あかい瞳ひとみが男に向けられていた。

「続き、するね」

身体を浮かせたフランドールは、男の身体に手を添そえると、今度はゆっくりと下ろしていく。

「ん、はああ……」

中は柔やわらかく、もうすっかりほぐれていた。

「んんっ……、ふあっ」

半なかばまで引き抜かれ、すぐに飲み込まれる。緩ゆるやかな動きでぬるりとした膣ちつひだ壁が絡からみつき、往復するたびに肉棒を舐なめていく。

「はあっ……んうっ、ふあっ……ああっ！」

浮かせて沈めて、引き抜いて飲み込んで、抜いて挿れて抜いて挿れて。

じゅぷっじゅぷっと、リズムを取るようにフランドールが上下に動いていた。

次第しだいにそのペースが速くなる。

「ほうん！ あんっ、あっ、んんっ！ ふっ、ああんっ！」

信じられない気持ちよさだった。

肉棒の先端から腰、脊髓にかけての神経が吸い出され、むき出しのまま快感の蜜に漬け込まれるような感覚。

撃ち込まれる快感が背中を走り抜ける。

込み上げる射精感。

男根がびくりと震えた。

「んああっ！ いふようっ！ ねえっ！ いくからっ！ だしてっ！ だしてえーっ！！」

男のモノを奥まで咥えて膣内がきゆうつとすぼまった。

「っ、くうううううううううう——っ！！」

大きく仰け反り羽を突っ張り、結合部を深く強く押しつけながらフランドールの身体が何度も跳ねる。

その振動に男根を刺激され、耐えきれずに沸き上がるまま、男は二度三度とフランドールの中に精液を吐き出した。

「ふああ……っ！ とけうっ……とけるよう……っ！」

フランドールは絶頂感ぜつちようかんに身体を震わせながら、注ぎ込まれた白濁液はくたくえきを胎内たいないに飲み込んでいく。

「あつたかいのがきもちいい……」

上を向いたまま身体を硬直させていたフランドールが、崩れ落ちるくずおように男の上に倒れ込む。

「すごい……」

嬉しうれそうにつぶやくのが聞こえた。

フランドールは甘えるように男の胸に顔を擦りつけながら身体を休めていた。ときどき、伸ばした舌が男の肌はだに触れて汗を舐め取なっていく。

しばらくして、落ち着いたフランドールは男のモノを身体の中に残したままゆっくりと身体を起こした。

「あなた、すごい……。気に入っちゃった……。ねえ、私とキスをしましよ
う？」

フランドールはそう言うと、何のつもりなのか自分の指に噛み付いた。傷口からあふれる血が赤い糸を引く。

その血を舐め取り傷口を吸い、口の中に血を含んだまま、フランドールの唇が男の唇と重なった。

「ん——」

わずかに開いた隙間からフランドールの舌が差し込まれ、口の中に血の混じった唾液が流し込まれる。

何のつもりだろうか。疑問を感じながらも、男は流し込まれたものを飲み込んだ。喉の奥でゴクリと音が鳴る。

フランドールの目が嬉しそうに細められた。男の舌に舌を絡め口の中を舐め回して、フランドールはゆっくりと唇を離す。

思いもしなかった濃厚なキスに男は陶然としていた。

「ふふふ……あなたはもう、私のもの」

口元に指を当て、楽しそうにフランドールが笑う。

それが合図だったのかもしれない。

どくり——と、男の中で何かが脈打つ。

身体の中が焼けるように熱い。

「知ってる？ 吸血鬼きゆうけつぎって、血を飲んだ人間を吸血鬼に変えることができるの」
フランドールの瞳が不気味な光を放つ。

「そして、自分の血を飲ませた人間の自由を奪うこともできる」

男を拘束こうそくしていた手足の枷かせが外された。だが、男は身体を動かすことができない。

「だからね、私の血を飲んだあなたの身体は——もう、私の物」

腰にぞわりとした感覚が生まれた。フランドールの中に入れたままの男根が、刺激を受けないまま硬くなっていく。

「ねえ、まだ続けましょう？」

男のモノがはち切れそうな程に勢いを取り戻すまで、ほとんど時間はかからなかった。大きくなったことを中で感じ取ったフランドールが、さっそく動こうと腰を浮かす。

ところが、すぐにバランスを崩して倒れ込んでしまった。

「……？」

フランドールは不思議そうな顔をして身体を動かそうとする。

「張り切り過ぎちゃった……かな？」

激しく動きすぎて腰に力が入らないようだった。もぞもぞと身体を揺らすかと思うように刺激が得られず、次第に不機嫌な表情になっていく。

そんなフランドールの顔に、ぽあつと笑顔が浮かんだ。名案を思いついたという様子だった。

「ね、あなたに命令するわ。——上になって、私を犯しなさい」

男が何かを考える前に身体が勝手に動く。

いままで上に乗っていた小柄な身体を床に押しつけた。その上に覆い被さる。フランドールの腰をしっかりと掴むと、まだ入ったままだった肉棒を途中まで引き抜き、じゅぷりと勢いよく突き入れた。

「んあうっ！」

奥を突かれてフランドールが仰け反る。絶頂を迎えたあとで敏感になっている

ようだった。

「っは……す、好きなように……動いていいよ。でも、全部抜くのは、ぜったい許さない」

言われて男の腰が動き出す。

男の意志なのか命令のためなのかわからない。

乱暴に突き入れていく。

「んくっ……はあっ！ んあっ！ あっ……ふあっ！ ああっっ！」

敏感な膣内を硬い肉棒が激しく往復し、フランドールの身体が何度も跳ねる。

だが、男は勢いを緩めない。

なぜなら「犯せ」と命令されたから。

それに、絡みつくようなフランドールの膣内は、恐ろしく気持ちよかった。

「ひうつ！ はやつ、あう！ ああっ！ もうっ、なかつ！ くるっ！ きちや

うう！」

フランドールの身体が大きく反り返り、びくりと一際大きく跳ねる。

「はあああううう——っ!？」

しかし、男は動きを止めなかった。

絶頂に震えるフランドールを押しえつけ、締め付けける膣内を強引に往復する。

「うあっ！　ぐう……っ、かはっ！　ひいつてっ！　くう……っ！　ひつて
るう！　のにい……っ！」

男はフランドールの様子を気にもとめない。さらに激しく腰を振る。

「とまんないっ！　とまんないよう！」

痙攣する膣壁が新しい快感を生み出していた。湧き出す快感を少しも逃すまいと、深く強く突き入れる。

もはや、自分の中に理性が残っているのかもわからない。

「はあ……ふあ……んっ！　ふう……あ……あ……っ！」

ようやく絶頂から解放されたフランドールはぐったりしていた。

男はかまわず激しく犯し続ける。

止めるわけにはいかない。それがフランドールの「命令」だから。

「んはあああっ！」

入り口ぎりぎりまで引き抜いて、一気に根本まで突き入れる。そのたびに、身

体を仰け反らせたフランドールが鳴き声を上げる。

そんな、初めてフランドールの中に入ったときと同じ動きを繰り返す。やがて腰の奥に熱い物が集まる感覚が生まれた。

腰の動きを速くしていく。

射精が近い。

幾度か大きく動かして、とどめのひと突きを打ち付けようとした時。

「だめえっ！ まだだめえっ！」

突然、男根の根本を締め付けられるような感覚。

一気に奥まで突き入れた。

だが、訪れるはずの絶頂感がない。

さらに何度も叩き付ける。

いまにも出してしまいそうなのに、射精することができなかった。

「あなたの、からだ……っ、わたしのもの、だから……っ！」

激しく突き上げられながら、フランドールがそんなことを口にした。

「も、もういつかいっ……いかせてっ！ そしたら……っ、ださせてあげ

るっ！」

すでに限界。いまにも爆発しそうだ。

そんな肉棒を根本まで突き入れる。

「はあううっ！」

フランドールが悲鳴を上げる。まだ出すことができない。さらに乱暴に突き入れた。中の襜が肉棒を擦る。快感が走り抜け、射精感が高まる。

それなのに、何度突き入れても出すことができない。

「あうっ！ はあっ！ あっ、あーっ！ ひうんっ！ うあっ！ はああっ！」

男はフランドールの腰を掴んで浮かせると、力任せに腰を叩き付けていた。

男の腰に打たれてフランドールの肌が赤く染まる。加減をする余裕など無い。乱暴に野獣のように、フランドールの中を蹂躞する。

「はあっ、あっ、ああっ！ んあっ、くるっ、ようっ！ んうっ、も、いい！

いいからあっ！ ひうっ……だしてっ！ だしてえっ！」

射精を抑えていた力が緩み、解放された灼熱が走り抜ける。深く強くフランドールの中に突き入れ、溢れ出す精液を胎内にぶちまけた。

「ああっ、あ、ああんうううう——っ!!」

しかし、まだ残っている。抑えられていたモノを出し切ってしまうまで終わらない。フランドールの一番奥に繰り返し肉棒を叩き付け、その度に白濁液を吐き出していく。

「はあっ、あう……っ！ んうっ、ん……はう……っ。ふあ……っ」

男は全てを流し込んだ余韻に浸っていた。

だが、まだ硬さが残る肉棒はフランドールの中でびくりびくりと脈打っている。すぐにでも勢いを取り戻せそうだった。フランドールの血を飲んだ影響なのかもしれない。

肉棒を少し抜いて、深く奥まで差し込んだ。

「んんあ……っ」

力なく横たわるフランドールは抵抗なく受け入れられる。

次の往復は入り口まで引いて大きく。

「ああ……はああ……ん」

あえぎ声を漏らすフランドールは、楽しそうな顔をしているように見えた。

男はどろどろの蜜壺みつぼを肉棒にくぼうで掻かき回し、快感を引き出そうとする。何度か往復するうちに、男のモノはすっかり元の硬さに戻っていた。

「あつ……ふあ、んっ……あつ、あは……っ、あははは……っ！」

哄笑こうしょうするような声がフランドールの口から漏もれだす。

ふと、フランドールと目が合った。

吸血鬼きゅうけつきの紅い瞳あかひとみ。

男の身体を支配する紅い光。

気がつくと、男の身体が勝手に動いていた。

フランドールの身体を抱かかえ、後ろ向きに倒れ込む。男の上にまたがる形になったフランドールの割れ目に、ずぶずぶと男根だんこんが飲み込まれていく。

「あははははははっ！ いいよ！ やっぱりあなたすごいよう！ まだおわりじゃないよね？ もっとたくさんしたいよね!? もっと！ ねえ、もっとつづけてくれるよね!!」

フランドールが望むまま、男は腰を跳はね上げていた。

「ひゃうんっ！」

浮き上がり落ちてきたフランドールの身体に、また腰を叩き付ける。

「っ、はははっ！ 好きよ！ 大好き！ 気に入ったわ、あなたは殺さない！
生きている間、ずっとずっと私の竿奴隷にしてあげるっ！！」

紅魔館の地下室に、嬌声の混じった狂笑が長く長く響き渡った。